経営情報研究
Vol. 4, No. 1

研究論文

経営学原理と哲学論との関連性
―― 哲学者の「哲学の文学的考察」を媒介に考える：総括的批判 ――

裴　富吉

Principles of Management and the Philosophy of NISHIDA Kitaroh：A Criticism of YAMAMOTO Yasujiroh's Theory of Business Management

BAE Boo-Gil

キーワード

西田哲学，行為的主体，公社企業，歴史的世界，絶対矛盾的自己同一，社会科学

1. はじめに―問題の限定―

筆者は，経営学理論の歴史的な解明，それも主に日本経営学史の批判的研究にとりくんできた。その経過において，日本の経営学者たちの理論主張をめぐり，当事者とのあいだで批判 - 反批判の応酬（やりとり）を余儀なくされたこともある。もっとも，そのような応酬のできた学者は，一部のごくまじめな人士にかぎられる。

その人士の１人が山本安次郎（1904年生まれ）である。山本は，現在〔1993年５月；本稿執筆時〕も現役で活躍している経営学者である（その後，1994年12月に死去）。関連するくわし

Received April 9, 1996

い論説については，拙著『経営学発達史—理論と思想—』にゆずる（学文社，1990年，189頁以下。そのほか，同書に注記されている関係の諸拙稿も参照）。日本の経営学者のなかでも，かくべつ特異な経営理論を提唱する，山本安次郎学説の批判的検討をあらためて試みたく思い，筆者はここに本稿をおこすこととした。

社会科学の諸分野では，特定の哲学的思考方法をその本質論的基底におき，理論を特質づけようとするものが多い。マルクス主義の史的唯物論を基礎とする経営学の理論展開や，批判的合理主義の哲学的立場から経営理論を構築しようとする志向などは，その好例である。山本安次郎の経営学説も，そうしたやりかたとまったく同様であり，西田幾多郎の哲学論を基本にすえ，持論の構成をおこなっている。

本稿の筆者は，山本学説に批判的考察をくわえ，これに対する山本の反論があったりして，論争も経験してきた。一言でいって，その結論は「ケンカわかれ」と形容するにふさわしいものであった。以後，山本のおかれている状況に鑑みて，さらに論争をつづけたり，相互の理解を進展させたりする機会はなかった[1)]。

さてここに，山本安次郎と同じ年にこの世に生をうけた老哲学者の１著がある。それは，藤田健治『西田幾多郎 その軌跡と系譜—哲学の文学的考察』（法政大学出版局，1993年）である。藤田のこの著書は，本稿の筆者が山本の経営学説に与えてきた批判的分析を，哲学論の立場からうまく裏づけてくれるものと判断できる。そこで，この哲学者藤田による西田哲学批判論をよく聞いたうえで，山本安次郎の経営学説の基本的な問題点をもういちど摘出し，それをより鮮明にする総合的検討を再度くわえてみたい。

2. 藤田健治『西田幾多郎 その軌跡と系譜—哲学の文学的考察』における主論点の整理

藤田『西田幾多郎』は，B6 版で本文140頁（活字は５号）であるが，重要な知見を多くふくんでいる。まず，それらをいくつかに整理し，説明しておこう。

(1) 冒頭で藤田は，「学問の世界ではその師に対してさえ批判の矛先を緩めないのが，むしろ当然であろう」という。しかしながら，「日本流に言うと，多くの非礼をおかしている」ことになるのが，この国での一般的なふんいきであるともいう。そしてさらにいう。人間に許される真理は，よしそれをとらええたとしても，けっして全体的絶対的ではなく部分的相対的である。この立場を忘れることなく，謙虚に遠く絶対的境地ともいうべきものを仰望して，はげむほかはないのである[2)]。

(2) 藤田は，西田哲学の主要問題点に関して，はじめにこう述べる。

[2-1]　西田の哲学的思索につねにあったものは，実は具体的現実があってはじめていえることを，原理論から逆に現実に降りてゆく方向をとっていたことである。

[2-2]　根本思想から個別問題へという構想。

[2-3]　まずある具体的現実的なものは，人間を中心に構成される歴史的世界である。そこがすべての出発点で，いっさいの原理的なものは，逆にそれを基礎づけるだけのものとなる。これは後期西田哲学のおおきな転換である。

[2-4]　この歴史的世界がポイエシス的であることは，西田の観想的立場のなごりである。

[2-5]　西田の現実的具体的というものは，普通の意味の現実的具体的ではなくて，原理的なもののもつ意味と考えている。

[2-6]　難解をきわめた西田哲学は，その原理論をさきにして，真に現実的具体的なものをあとにすることによって生ずるのであって，これを逆転して，真に現実的具体的なものをさきにして，原理にさかのぼることをあとにすることによって，すべては明快になり，かつ何人にも理解さるべきものとなる[3)]。

――以上，原理を優先して，現実・具体をあとにするという，西田哲学の観想のしかたに関する問題である。

(3)　藤田はつぎに，西田の「歴史的世界」について，こういう。

[3-1]　西田の最後に到達した世界は，歴史的世界であった。この歴史的世界を構築する原理は，絶対矛盾的自己同一にほかならなかった。

[3-2]　《第１の疑問》　ポイエシスとプラクシス，具体的にいえば表現〔文化〕と実践〔政治〕の同一・一致をいうばあい，つねに表現〔文化〕の面を強調して，この表現〔文化〕をこえる実践〔政治〕の意味をないがしろにして，むしろ実践〔政治〕を表現〔文化〕とみなそうとする。こうなると，歴史的世界は，文化の世界となって，歴史的事実も表現をこえた政治的実践の世界ではなくなる。しかし，はたして文化と実践ないし政治とは，そのようにひとつであろうか。

[3-3]　《第２の疑問》　西田は歴史的世界を絶対矛盾的自己同一とみようとする。この「即非の論理」ともいうべきものと，多と多のあいだの〔１対１の対立ではなく，多くの多のあいだになりたつとする〕対立統一の論理とは，いかにして協調しうるか。西田が絶対矛盾的自己同一にこだわるかぎり，その思想は一方的な辺頗なものとならざるをえないのではないか。

[3-4]　西田はヘーゲルの過程的弁証法に反対するが，過程的とは一定の進行過程をとることで，それには時間的経過なくしてはありえない。過程的なることを否定することは，歴史的弁証法に時間性を否定することである。しかし，歴史というものがはたして時間性を排除してなりたちうるか[4)]。

――以上，歴史的世界を絶対矛盾的自己同一とみようとする点に関する問題である。

(4)　西田の立場は，自分の考えていることが自分の思想の完成をしめしていた。この立場においては，自分はひとつのエリート的人間〔特殊人・無為の真人〕であることをしめしている。この点は問題である[5)]。

[4-1]　すべてを眺めつくした立場というものは，人間からそう思えるだけで，現実にはけっして全体ではない。そう考えると人間のがわでは，遠く全体的真理を望んでつねに努力するほかない。それゆえ，人間はつねにエリートではなくて，凡庸な存在であること，そう人間をみることが正しいのではないか。人間に与えられるものは，つねに全体的真理ではない。魂の昂揚したさい，自分は全体的真理をえたと考えても，それはそうみえただけで，人間の増上慢にすぎないという意味で，完成の未完成とでもいえよう。西田のいう絶対矛盾的自己同一も実はそうしたもの、ひとつの展望（パースペクティブ）にすぎないのではないか。

[4-2]　こうした考えかたの根本には，哲学と宗教との相違があるようである。宗教は，魂の昂揚によって，ある意味でエリート的人間を肯定することにすすみがちである。哲学は，冷静にそのまえに立ちどまって思索する。そこに両者の相違がある。理想を書くなら，理想であることを断って，現状はそれへの切望というかたちになるであろう。これは，哲学的人間学として考えなくてはならないことである。

[4-3]　理想的世界に目をむけることは，逆に現実にある暗い面，悪の面がみおとされることとなる。こうした暗い悪の面が西田にあっては考慮されていない。それは，原理論にのみ目をむける彼の根本的態度にも深く根ざしている。またいえば，それは，エリート的立場に立って，エリート的世界のみに目をむける結果であり，彼の根本における人間観によるものといわねばならない[6]。

――以上の問題は，西田が自分の思想の完成を意識し，自分がひとつのエリート的人間であることをしめしている点である[7]。

(5)　西田哲学の全体的立場は，原理的指向がつねに優位をしめ，いわゆる「上からの哲学」という本来の姿をついに払拭できないで終わる[8]。

[5-1]　そのばあいにとられる立場は，アリストテレス的主語論理に対してみずからの特色とする述語論理の主張である。

[5-2]　この悟りをえた立場，哲学的にいえば，望むところの真理をえた立場が主となって，すべてを一元から導出するという原理的立場とひとつとなる。苦悩が歓喜にかわる魂の体験は，宗教においては現実の体験であり，法悦ともいわれる。そして恐らくは，これを基礎づける原理が「即」の論理であっただろう。その体験によって迷いをのりこえて悟りの世界にはいった者は，一挙にしてこの悟りの世界にあって，爾後は迷うことがない境地にはいる。

[5-3]　西田哲学は，その本来の普遍の優先の立場によって，一挙にして悟りの境地にいたり，それを堅持する禅の立場にきわめて酷似するといわざるをえない。

[5-4]　西田の考えかたには過程的な考えはない。過程といわれるものを瞬時に圧縮して，その時その時に創造的に働く歴史の局面をいわんとするようにみえる。これは，明らかに彼の形而上学的信念である。田辺　元のいう「証明なき思想の開陳」である。

[5-5]　絶対矛盾的自己同一とは，絶対に矛盾したものがそのまま同一であるということである。これは，矛盾対立したもののいちおうの成立は認めたもうえで，それが弁証法的に統一されるということではなく，絶対に矛盾したものがそのまま同一であることの主張である。この立場にしたがえば，現実は矛盾だといわれれば，否そうではない本来一如なのだと答えられる。また本来一如かといわれれば，否矛盾なのだと答えることもできる。変幻自在にいずれともいえるのが，その立場ということになる。

[5-6]　すくなくともドイツ観念論の弁証法をしるものは，西田の企てにもとより十分の同情をもち，その形而上学的魅力を愛するが，またすくなくとも一方的偏向と西欧に対する不必要な独自性の主張に，危惧を抱かざるをえないのである[9]。

――以上，西田の「証明なき思想の開陳」であること，形而上学的魅力にさけえない危惧の問題点である。

(6) (5)の関連でいけば，西田には，この世の悪の面に対する感覚が希薄のように思える。このことは，彼が歴史的世界を中心として，それの本質をみるばあいに，その姿がいかにあるべきかを考えるに急で，それがそうなれない面，その悪の面の痛烈な体験を，真に深く感じえなかったことをしめす[10]。

[6-1] 本来，歴史的世界は客観的対象の世界であり，その現実は猥雑で，ある意味で欲望のひしめく〔それは西田の考えるようなものをはるかにこえる〕諸悪の世界である。西田はそれに気づかぬはずはないにもかかわらず，この世界をもってプラクシスすなわちポイエシス＝表現の世界とみて，そしてそれでも，プラクシスの世界の現実の悪をみることがさけがたくなると，民族的国家をも宗教化してみることにすすむ。

[6-2] 西田の現実肯定は明らかである。それはついに，現実の否定的面をいかにかして肯定的にみなおそうということになる。こうした考えかたには，悪に対する視点の希薄であることを指摘せざるをえない。

[6-3] すべては神の手にみちびかれる良き世界である。そしてそれを風味づけるものとしてのみ悪はある。そしてそれ以上ではない。西田は，真に悪を悪としてどこまでも追及するよりは，悪を全体の調和のうちで，みるほかないのである。

[6-4] 西田はキルケゴールを完全に把握せず，ただ体系否定の点を棄て，宗教のパラドクシカルな点だけをとりあげている[11]。

――以上，この世の悪の面に対する感覚が希薄である，西田の歴史的世界観の問題点である。

(7) 西田哲学の転換可能性。西田の原理論に終始する「上からの哲学」が，いかに逆転して，現実から原理へという「下からの哲学・人間論」になりうるか。これが成就すれば，一見難解にみえる原理論的哲学が，現実的哲学の逆立ちとみるべきことが明らかとなり，哲学が現実とはなれずして，その真の価値が発揮されうることがわかるであろう。そして，その逆転がまた人間のエリート的ありかたから，日常普通の人間への転換と裏腹になっていることをみるべきであろう。それ以上は，哲学としてふみこえてはならない宗教的昂揚による立場しかないことに思いをいたすべきである[12]。

(8) 西田には一方的な主張が多い。日本もしくは東洋に独特ということが，つねに双方をゆるす寛容ではなく，自分の立場を独特とする反面，普遍性に欠けるうらみがある[13]。

以上(1)から(8)まで，いずれも哲学者の西田哲学論批判である。いままでの筆者の批判的分析からもわかるように，その西田哲学論を経営学本質論の基底におく山本安次郎の経営学説は，西田哲学流の思考方式に全面的に依拠したものである。その全面的な依拠関係は，山本学説に西田哲学の諸問題点を，そっくりそのまま継承させることになっている。

3. 西田哲学論と山本の経営学論

ここではごく簡単に，山本経営学説を解説しておくにとどめる。シベリア抑留の体験を経て，国立大学の教員に復帰した山本は，昭和29年に『経営管理論』（有斐閣）を公刊する。本書は，山本の経営学的立場をこうまとめている。

本書は行為的主体存在論の立場乃至主体の論理に立つ経営管理論の試みである。著者の考

えるところによると，真の経営学はアメリカ的経営研究の素材とドイツ的経営経済学方法とを相互に検討し，しかも経営の現実の構造の把握を基礎に，これらを超容面の契機（アウフヘーベンス・モーメント）として統一する新たな経営の論理によってのみ確立せられる[14]。

「恐らく何人もこの行為的主体存在論の立場に帰着せざるを得ないであろう」[15]という山本の発言は，経営学の原理的立場に対する彼の絶大な，かつ恐ろしいまでの確信，いわば「迷うことがない境地」を表明するものである。

山本が，「文献史的乃至学説史的な研究や或は単に論理主義的な認識論による体系構成という安易な道には納得出来ず，むしろ生の根源から存在論的に究明しなければならないと考えるに至った」[16]というとき，彼自身の前提する学問遍歴は，こういうものであった。

準戦体制から次第に戦時体制に移行し，経済統制が強化され，激化する戦争の影響もあって，自由な研究や発表もとかく妨げられ，外国文献も杜絶えて研究は停滞しがちとなり，さらには中止のやむなきに至り，極く少数の人びとのみが自己の道を守り，沈潜することが出来たのである。著者は大学時代の恩師で建国大学副総長作田荘一博士（1878－1973）に招かれて昭和15年春から満州建国大学に奉職，同僚の哲学者や経済学者とともに『哲学論文集』によって西田哲学を本格的に勉強する機会をもち，西田哲学をどうやら理解するとともに，新カント学派と袂別して，ここに初めて本当の経営学の哲学的基礎に逢着し，開眼の喜びにひたることが出来た[17]。

山本は，西田幾多郎『哲学論文集』によって西田哲学を学び，新カント学派と袂別して，「本当の」経営学の哲学的基礎に逢着し，「開眼の喜びにひたることができた」という。これは山本流にいえば，「本格的な経営学」の創作開始である。この「本格的な経営学」は，それまでの方法論的研究の総決算的体系化である[18]。

山本は，経営の現実をしればしるほど，世界の経営諸学説に対して批判的とならざるをえず，このようにして世界の経営諸学説の比較的研究から批判的研究にすすみ，不遜ながら著者「不動の見地」が確立できたと思うにいたったのは，昭和15年春からはじめた満州国建国大学での「西田哲学」の研究会を機縁とする経営哲学への開眼によってであった，と回想している[19]。

「不動の見地」を確立させたという「経営哲学への開眼」は，山本に独特のいいまわしであるが，くわえて彼は，随所で自説の「世界史的使命」性も強調している[20]。ここにいたり，山本経営学説の批判的検討は，西田哲学との切っても切れない関連性においてこそなされるべきことが，示唆されるのである。

この件に関して山本は，これまで，西田哲学的思考方法が経営学の研究方法として有効であること，西田哲学の経営哲学的性格をあまり強調しすぎたきらいがあるかもしれず，そこから種々の誤解も生じることにもなっていた，と述べている。そして，自説〔山本の主張〕の理解にさいして「西田哲学依存への誤解」を犯している者が，まさに筆者〔裴〕であったとも述べている[21]。

だが，山本のこの断定は，いささかならず責任転嫁の言説である。このことは，つづく筆者の論及が明らかにしていく。

前節２の(1)から(8)までに解説された，藤田健治による西田哲学批判論を敷衍しながら，山本

経営学説を批判的に分析していこう。

〔1〕山本は，筆者から投げかけられた諸批判に，当初は余裕をもって応接していたが，筆者の批判がしだいにきびしくなり，双方の立場がとうてい相いれないものであることが判明していくつれて，権威主義的な態度で筆者に接するようになっていった。

かつては，馬場敬治の東京帝大権威主義に困惑した体験のある山本が，本稿の筆者にかえした反批判論文の結末部分ではこういっていた。「若いのだから……批判の前に深い理解を」，と[22]。そういいながら山本が，自説の絶対的優位性＝権威性をくりかえし説いていたことは，印象的であった。

山本の思考方式は，自分の経営理論の絶対性を寸毫も疑わないものである。したがって他者にむかっては，「自説の感化をうけること」がなによりもの絶対的な要請となる。2の(1)で指摘されていたような，「人間に許される真理はけっして全体的絶対的ではなく，部分的相対的である」ことをまったく意に介さない立場が，山本学説の特質である。

〔2〕山本の研究経歴からすれば，「西田哲学流の経営学論」の到達点→《開眼の境地＝不動の見地》の得度以来，それを普遍的立場として半世紀以上も経過したが，彼は，たゆまずその確信を深めてつづけてきたようである。げに恐ろしき自信のほどである。だいたい，半世紀以上もその基本的立場や思考基盤がすこしも動揺しない，いつの世にも適用でき妥当する，などという学説理論があるとはとうてい考えられない・信じられない，といったほうが尋常な・正直な学問精神であろう。

それがどうであろう。山本は「私見に対しては極めて少数の理解者と多数の反対者のあることを知っている」[23]といいつつも，結局，自説の確固不動に関する絶対的な確信を高調しつづけることだけに熱心であった。

山本「行為的主体存在論」的な経営学論は，2の(2)で指摘されているように，原理を優先して，現実・具体をあとにするという西田哲学流の観想である。それは，現実的具体的なものを，原理的なもののもつ意味においてしか捕捉しないみかたである。いわく，経営学は「経営の学」，「経営の経営学」と。彼は自説の歴史的普遍性を無限に信じている。社会科学としては，こうした学的姿勢じたいがまずもって問題であり，非常に要注意である。

〔3〕山本は，経営学者として，西田哲学のいう「歴史的世界を絶対矛盾的自己同一とみる」観点を，いかにふまえていたか。これがつぎの問題である。

この問題は，山本『経営学の基礎理論』（ミネルヴァ書房，昭和42年）第2篇「経営学と経営構造論」の第5章「経営存在の主体的構造」と第6章「経営構造の発展と主体性の問題」にくわしく叙述されている。これらの叙述は，まさに西田哲学流の用法・修辞にならった論旨の展開である。

西田「歴史的世界」が山本「経営的世界」になる。この「経営的世界」は，山本経営学において，すべての出発点となる。それゆえ，西田哲学の問題点がそのまま山本「経営的世界」の問題点ともなる。それは，原理から現実・具体への一方的・辺頗なものとならざるをえない。西田は，ヘーゲルの過程的弁証法に反対し，歴史的弁証法に時間性を否定していた。歴史というものが，はたして時間性を排除してなりたちうるか。山本「経営的世界」の問題点も同様に

類推できる。時間性＝歴史性を排除してなりたちうるからこそ，自説の経営学論の絶対的な優位性と歴史的普遍性を，時空をこえて力説できたのである。

過去，あの戦争の時代，経営学という学問の任務に関して，山本はこういっていた。

経営学を根源的なる「行為的主体存在論の立場」，略言すれば，「行為の立場」に於て新らしく基礎づけんとするにある。経営学を歴史的現実の根源的主体たる国家の基体即主体の自覚に立つ行為的立場から，単に方法論的抽象的にではなく，飽くまで歴史的現実，行為的主体存在の世界に於て具体的に成立する現代経営学の性格に於て形成せんとするにある。この歴史的現実に於ける危機を国家的根源的危機と自覚し，かゝる危機を媒介に，近代的企業の公社企業への現代的転換を根拠づけ，同時に近代経営学の現代的転換を試みんとするにある[24]。

太平洋戦争：大東亜戦争をむかえる年に書かれたこの文章は，歴史的弁証法＝時間性の制約を意識し，これを生かした内容のようにみえる。しかしながら，その文章の骨格それじたいは，歴史的弁証法＝時間性の制約〔戦時体制期の国家主義：全体主義：軍国主義下，植民経営地における公社企業論の提唱〕をまったく無視して，その後にも適用される。山本学説の歴史的な普遍性の無限大的活用を観察するとき，われわれは心底より驚愕するほかない。

国家の立場は，その後の山本学説からは，いちおう消去されている。公社企業論も，筆者の批判をうけてからは，ほとんどふれなくなった。のこる核心＝骨格は，経営学本質論としての「行為的主体存在論の立場」だけとなる。

しかし，この山本流「行為的主体存在論の立場」は，変幻自在・融通無碍な生き物のようである。というのも，それだけは今日まで方法論的な有効性を当然にたもち，かわらぬ立場を誇示して高揚されているからである。このことは，２の(5)で指摘されていたように，〈西田哲学の全体的立場は，原理的指向がつねに優位をしめ，いわゆる「上からの哲学」という本来の姿をついに払拭できないで終わる〉ことと根本的に関係している。

〔４〕山本の「開眼の喜びにひたることができた」という発言は，「悟りをえた立場・宗教的な法悦体験」「禅の立場」である。またそれは，田辺　元のいう「証明なき思想の開陳」であることを忘れてはならない〔２の(5)の指摘〕。さらにそれは，自分の立場が自分の思想の完成をしめしていたとする，エリート的人間〔特殊人・無為の真人〕での発想であることをしめしている〔２の(4)の指摘〕。

〔５〕山本において重大な問題は，学者の立場にかかわる戦争責任である。この問題性は，山本『公社企業と現代経営学』（建国大学研究院，昭和16〔康徳８〕年９月）からの前段〔３〕における引用でわかるように，２の(5)の問題にかかわるものである。

すなわち，本来「歴史的世界」は客観的対象の世界であるゆえ，「諸悪の世界」である。ところが，山本は，経営学という学問の，客観的対象の世界である「経営的世界」が，その「歴史的世界」という基盤のうえに存在するものであるかぎり，これと同じ性格を必然的に有せざるをえないにもかかわらず，これらの事情をいっさい無視する。

つまり，「悪に対する視点の希薄」，「真に悪を悪としてどこまでも追及するよりは，悪を全体の調和のうちでみる」，「政治を文化とみなおそうとする」など，現実の否定的面を無視する

観点は，経営学者山本安次郎の学問倫理的無感覚と，社会科学者としての「悪に対する感覚の希薄」をまざまざと証明するものといえる。

もっとも山本は，自分のうけた被害者的体験〔＝本人が他からこうむった悪の面での痛烈な実体験〕については敏感である。こういう。

> 戦争終末直前には現地召集にて入隊，ソ連へ抑留，研究どころか，生命の危機を日々痛感し，遂には無感覚となるほどであった。多かれ少なかれ，皆が戦争犠牲者であった[25]。

本稿の筆者は，現地の「満州国」建国大学で，植民地経営を推進させる「加害者的」ながわにおいて学問していたことの意味を自問しえない，山本という１社会科学者の哀れさを感じないわけにはいかない。第２次世界大戦後，その不幸な出来事に関しては，戦後処理という課題がのこされ，戦争責任にとりくむ姿勢では，西ドイツと日本の両敗戦国間においておおきな相違を生起させた〔むろん，西ドイツの姿勢に関しては，その根本的真意に批判もあるが〕。山本の感性も，この相違にそってうけとめてよいものだろう。

当時山本は，社会科学者の立場において，満州国という「歴史的世界」におかれていた「経営的世界」をてこに，経営学者として，「全体的真理」の実現を原理的に眺望し，これを進展させることを期していたはずである。つまり，彼はそこに，自分のいだく経営「理想〔→公社企業論〕」を画くことを原理的に明示していたはずである。だが，その原理的眺望は，歴史の推進力のまえにもろくも潰えた。それでも山本は，その公社企業論をささえていた，持論「経営行為的主体存在論」の実効性だけは，その後もとなえつづけてやまない。これが「証明なき思想の開陳」でなくして，なんであろうか。

〔６〕西田哲学に依拠し，立論される「行為的主体存在論」的経営学論は，日本もしくは東洋(？)に独特といわれ，この点のうらがえしとして普遍性に欠けるうらみがあった〔２の(8)参照〕。いわばそれは「和魂洋才」論の，西田哲学論のくびきといえる。こうした思考方法が，第２次世界大戦の勃発を目前にしたころ，欧米文献の移入杜絶を契機に生じていた事実に注目したい。

藤田健治はいう。

> 本来，個人にせよ民族にせよ，その独特の経験は，一面においてその個人なり民族なりに特有のものを示すとともに，また同時にそれは他の民族によって理解される普遍性をもったものでなければならない。他民族によって理解されるということは，そこに意味理解において相通ずるもの，共通性をもつもので，その意味において普遍性をもったものである。……つまりは普遍的に理解されることによって，それは単に個人に独特のものでなくて個性的なものとなる[26]。

大東亜共栄圏イデオロギーにもとづいた，アジア侵略思想に当然のように加担していた「経営哲学」＝経営行為的主体存在論に，はたしていかほどの普遍性・個性が認められるか，ということである。しかも山本学説は，「上からの哲学」であって，原理から現実をみるという方途を採用していた〔２の(7)参照〕。またそれは，民族的国家も宗教〔表現〕化し，全体の調和のうちに収めようとしていた〔２の(6)参照〕。

戦時中の山本理論には現実的な妥当性が欠けていた。敗戦という事実がその点をはっきりさ

せた。いいかえれば，その経営理論がもっとも現実的であり，具体的であるかのように主張されていたときに，実はそうではなく，それは原理的な「上からの哲学」として，現実からはみごとに裏切られていたのである。したがって，敗戦後の山本学説は，国家的目標＝「公社企業論」をうしなったがゆえに，〔皮肉なことに〕なおさら「原理的指向」を強めながら，独自性（！）ある主張をかさねていくこととなる。

4. むすび—人間の学問—

藤田はいう。海辺でひろう貝とたとえられる，部分的真理をみいだすにすぎない謙虚の心もち〔ニュートンのことば〕をうしなったとき，科学も宗教の昂揚と区別なく，尋常普通の人間の立場をはなれる。人はこれを恐れなければならない。そのとき人間は，みずからそう信じながら事実はそうではない自己を反省して，自己の真実の姿を銘記すべきである。

要するに，原理論で終始することなく，もっとも経験的な具体的な現実からはじめることで，哲学も科学もかわりない。現実から原理へであって，原理から現実へではないという，きわめてあたりまえの事実，これが人間の立場である。

人の世界にありながら，いつかそれをこえて神の世界にちかづき，ときに神の世界とひとつになる魂の昂揚を経て，全体的真理をえたと考える。しかし，哲学はこの魂の昂揚によって全体的真理をかちえるというような法悦の境にはいることを拒む。尋常普通の人間は，つねに部分的真理しか与えられず，その一条の光に照らされて，それをつうじて全体的真理を仰望するにとどまる[27]。

うけとめようによっては大言壮語にも聞こえる，山本流の理論「経営行為的主体存在論」は，その後に輩出してきた若手経営学者には，なにか壮大な立論がふくまれているように映ったようである。一定の数の経営学者が，山本理論のファン的存在となっている。彼らの共通する意見では，山本理論には，なにかよくわからないがとても魅力があって，とにかく惹きつけるものがあるように感じるそうである。

筆者は彼らに対して警告したい。まず哲学をよく学べ，と。哲学専攻者のように理解はできなくとも，一応の次元での理解ができれば，山本学説のからくりはたやすく解析できるはずである，と。「難解に見える原理論的哲学が現実的哲学の逆立ちと見るべきことが明らかとなり，哲学が現実と離れずしてその真の価値が発揮され得ることが解る」[28]。藤田のことばでいえば，「下からの哲学・人間論」でみていくこと，「哲学の文学的考察」が必要である〔2の(7)参照〕。

筆者はさらにいいたい。現実との対応関係をよく観察して，山本学説に接するようにせよ，と。現実との接点をどのようにもっている理論かを十分にみきわめてから，いかなる学説でも評価すべきではないか，ということである。戦争に積極的に加担する経営理論を構築していたことなど忘れていいというのでは，社会科学者の学問として失格である。社会科学はつねに体制・階級・民族・風土などの諸問題に直面している。だから，これらの問題に対面してこそ，いずれの経営理論も，その学説真価を試されることとなる。

その意味で山本経営学論は，あの戦争の時代にすでに試金石をあてられた経験をもつのである。ただし，山本学説「経営行為的主体存在論」という哲学的観想の側面を除外することがで

きれば，たとえば，山本『経営学要論』（ミネルヴァ書房，昭和39年）は，「経営学総論」教科書として有用な中身を〔現実から原理へであって，原理から現実へではない〕提示しているといえよう。

整　理。――筆者が山本経営学説に関してとくに感じた問題点は，こうである。

①　学問の学問，科学の科学である哲学は，自然・人文・社会科学を問わず，各領域の個別学問に啓示を与え，一方的に思索の方向性を指示するだけの関係にあるのだろうか。逆に，各領域の個別学問の知見が，哲学のありかた・性質を変質・発展させていくという関係も，当然前提してよいはずである。

山本学説についていうならば，西田哲学→経営学の関係だけでなく，経営学→西田哲学，したがって西田哲学⇔経営学という相互関係を想定してよい，ということである。これは，学問・科学間における関係次元での，原理と現実との関連性問題である。山本においては，哲学→経営学の関係しかなく，経営学→哲学したがって哲学⇔経営学の関係は，基本的・根底的には認められていない。山本学説の歴史的普遍性の秘訣は，このへんにありそうである。

②　①からさらに導き出される難題は，山本における自説構想の絶対的優位性・歴史的普遍性の高調は，必ずしも文字どおりにはうけとれないということである。

山本の思考方式は，自説理論がもっとも優れており，他にこれを凌ぐものはないという高み：認識である。こうした研究者の態度は，藤田のことばによって「増上慢」だと指弾されているとおりである。そうした学的姿勢は，人間存在の限界をしらぬ，神と自分を同等視しかねないものである。それでは，学問・科学の進展が期待できないこととなる。

かりに，経営学説史が山本安次郎的学説史であるとするならば，到達点をしれば十分であって，それへの未完成の理論を過去にさかのぼる必要はなくなる[29]。

そうなると，日本の経営学界は，山本１人いて，彼の経営学説があればすべてこと足れりという事態になる。まさに，すさまじいまでの妄信，神をも恐れぬ精神である。人間技とはとうてい思えない。いいかえれば尊大無比，唯我独尊，そして夜郎自大！

それでも，山本安次郎は以下のようにいう。この引用は，本稿の筆者の批判をうけて，しばらくのあいだ引っこめていた論点に，再度言及しているものである。

> 「資本の論理」の近代的企業経営に高い「経営倫理」を要求することは本来無理ではあるまいか。……むしろ困難であっても積極的に会社制度の「現代的」変革をこそ求むべきではないか。……その一つのヒントとして昔満州国で研究した会社制度に対するその飛躍的発展としての公社制度の研究をあげたい。それは株式会社－特殊会社－国策会社－公社企業で，わが国で廃止された似非公社制度とは根本的に異なるものである[30]。

昭和16〔1941〕年，「満州国」において，山本安次郎は，「近代的企業の公社企業への〈現代的〉転換」を高唱していた。当時，その〈現代的〉転換を要請したという高い「経営倫理」が，いったいどのような「体制規範」と結着していたか，ここであえてふれる必要もない。

念のため，一言だけいっておきたい。「満州国経倫の目標は太平洋を中心とする最後の世界的争覇戦に備ふることに在り」（「満州国協和会」創立理念より）。これはまさに，「高度国防国家」理念の先駆たることを期待された「満州国」の性格を適切に表現したものである[31]。

平成5〔1993〕年，〔戦後半世紀を経て〕，再び彼は「会社制度の『現代的』変革」を提唱する。この調子でいくと，また半世紀後〔たとえば西暦2043年（！）としておこう〕になっても山本は，再三，上記とまったく同じ標語：「会社・企業の〈現代的〉転換・変革云々……」をかかげるにちがいないだろう。

本稿の筆者はもういうべきことばをもたない。嗚呼（！）とただ呻くのみである。

……

雑誌『現代思想』1993年1月号は，本稿の議論〔結末〕に対して示唆に富む論述を多く与えている。

① 理念が経験的事実に即して世界認識の中に適切に位置づけられ，それに基づいて的確な現状批判がなされるのでなければ，そこでの議論は結局は現状追認の思想に終わることになる[32]。

② 現代に通用する理論として仕上げるためには，近代とその克服という明治以来の日本の問題関心のうちに戻してそれを歴史的に理解し，その上でその現代的意義を評価するという手順を省いてはなるまい。

③ かりに「不連続の連続」や「(絶対) 矛盾的自己同一」といった西田のタームを，水先案内に立てるならともかく，問題への解答として掲げるなら，それは困難なところでこそ模索を続ける思惟――あえて思弁と呼んでもいい――の放棄である[33]。

西田幾多郎自身は，こういっていた。

理論的真理というのは，知識はどこまでも行為的直観の現実，すなわちいわゆる経験の地盤をはなれることはできない。真理の標準は，行為的直観の現実を地盤として，個性的構成の成否いかんにある。作られたものから作るものへと考えられる歴史的現実の世界は，どこまでも制作的である。この故に個性的に動きゆくのである。

われわれの思惟はどこまでも歴史に制約されているのである[34]。

経営学者山本安次郎は，社会科学であり歴史科学である，経営学の思索＝思弁〔批判，評価，知識，経験〕において，まったく「哲学していない」と断ぜざるをえない。また，山本学説の「最たるアポリアは権力に対する道徳的妥協である」[35]といえるが，彼自身にそうした認識は皆無である。

その意味では，西田幾多郎の哲学について，つぎのようにいわれているが，山本安次郎の経営学は，それ以前にとどまっていることも指摘しておかねばならない。

西田のいう「永遠の今」や「絶対の現在」の立場から歴史的実践の概念を説明するのはきわめて困難な課題であるといわねばならないであろう。……ここに，まさしく西田哲学のアポリアがある。

西田哲学はすべてのものを「永遠の相の下に」見ようとするかぎり，一種のスピノザ主義であるといえよう。そしてスピノザ主義の欠陥として現実の善悪をうまく規定できなかったように，西田哲学においても道徳的善悪はその正当な地位を有していない[36]。

西田の「実験」から，その「失敗」からさえも，多くのことを学びとりうるし，また学びとらねばならないであろう。昭和ファシズムの時代に，この哲学がナショナリズムのウルト

ラ化にたいしては抵抗を試みながら，かえってその抵抗を通して，天皇制国家の歴史的動向に一つの理念的な弁証さえも提供している姿を，ありありと見出すことができる。この点にかんするかぎり，この哲学の失敗はあまりにも明瞭である[37]。

西田が，決して軍事行動そのものを批判する立場に立っておらず，場合によってはそれもありうると考えていた[38]。

西田をはじめとするアカデミズム哲学者が，社会諸科学の知識を欠くため，社会や国家の認識をあやまり，まちがった国家主義に陥っていた，と批判されるのはなぜか？

内面への深化による苦悩の解決としての哲学は，あるいは個人の個人的な生活態度を規正し，あるいは個人の苦悩のなぐさめとなるようなことはあっても，そしてそのかぎりにおいて，ほかの個人に影響をおよぼすことはあっても，その方向のみにとどまって，国家悪や矛盾の自覚と洞察を欠くならば，世の社会的・政治的矛盾を除去し，世を救済するような，強い力とはなりがたい。それのみか，かえってゆがんだ現実の傲慢を許し，それを温存させてしまうことになる。

西田は，内の問題と外の矛盾とを，「即」の論理によってむすびつけ，内即外・外即内とすることによって，かえって外の矛盾的現実をそのまま黙認し，そのかぎりで外を許容するような結果になってしまった。それのみか，個人的人格の実現を可能にするものとして，ヘーゲル的に国家を美化し神聖化した。国家の底に，かえって個人や社会を苦悩させる矛盾や国家悪の存することをみぬきえなかった[39]。

かまびすしい毀誉褒貶に晒されてきた社会学者清水幾太郎は，こう関説していた。

危機に立つ人間は，十分な時間を用いて静かな反省を続けることが出来るのであろうか。自分の主張の限界を知り，敵対者の主張の部分的な正しさを認めるという仕方で，人間は危機のうちに行動することが出来るのであろうか。そういう科学的で公平な仮説的な主張のために忠誠を誓い，生命を投げ出す人間が何処かにいるのであろうか[40]。

この最後の引用は，いまは亡き山本安次郎に，筆者がふたたび投げかける根本的な「問いの構造」となろう。

注

1) 斯学界最長老の立場に立つにいたった山本安次郎の，経営学的思考方法に関する最新の発言は，1993年5月29－30日にもたれた，経営学史学会創立大会の記念講演においてなされている。題目は「経営学史学会の創立を祝して」であった。経営学史学会編『経営学の位相』文眞堂，1994年所収，山本安次郎「経営学の本格化と経営学史研究の重要性—経営学史学会の創立を祝して—」。
2) 藤田健治『西田幾多郎 その軌跡と系譜—哲学の文学的考察』法政大学出版局，1993年，4頁，5頁。
3) 同書，43頁，44頁，46頁，51頁，50-51頁。
4) 同書，57頁，58頁，60頁，71頁，61頁。
5) 同書，72-73頁。
6) 同書，73-75頁，75頁，75-76頁，76頁。

7) 同書，72-73頁。
8) 同書，77頁。
9) 同書，78頁，80頁，81頁，83頁，86頁，87頁，88頁。
10) 同書，96-97頁。
11) 同書，97頁，99-100頁，100頁。
12) 同書，122-123頁。
13) 同書，129頁。
14) 山本安次郎『経営管理論』有斐閣，昭和29年，序，３頁。
15) 同書，序，3-4頁。
16) 同書，序，５頁。
17) 山本安次郎『日本経営学五十年－回顧と展望－』東洋経済新報社，昭和52年，48-49頁。
18) 山本安次郎『経営学研究方法論』丸善，昭和50年，序文，iv頁。
19) 同書，序文，ｖ頁。
20) ここでは，同書，序文，ｖ頁参照。
21) 山本『日本経営学五十年』200頁。
22) 山本安次郎「経営学と哲学との関連について—裴教授の批判に答える—」，亜細亜大学『経営論集』第14巻第２号，1979年３月，182頁。現在の時点（1993年５月）でも思うことだが，筆者の山本学説に対する理解は，斯学界において，かなりの線まではいっていたものと考えている。これは率直な所感である。
23) 山本『経営学研究方法論』序文，vii頁。
24) 山本安次郎『公社企業と現代経営学』建国大学研究院，昭和16〔康徳８〕年９月，はしがき，２頁。
25) 山本『日本経営学五十年』75頁。
26) 藤田『西田幾多郎 その軌跡と系譜』136頁。
27) 同書，139頁，139-140頁，137頁。
28) 同書，123頁。
29) この点については，伊東光晴・根井雅弘『シュンペーター』岩波書店，1993年，166頁参照。
30) 山本安次郎「組織研究の現代的課題」，組織学会『組織科学』第26巻第４号，1993年４月，３頁。
31) 岩波講座近代日本と植民地２『帝国統治の構造』岩波書店，1992年，183頁。
32) 清水太郎「『歴史的形成作用の論理』の光と影」『現代思想』1993年１月，129頁。
33) 中岡成文「西田哲学の知と悲しみ」，同誌，146頁，147頁。
34) 西田幾多郎全集第８巻『哲学論文集第１・第２』岩波書店，昭和40年，563頁，346頁。
35) 瀬川　浩『新版経済哲学の方法序説』敬文堂，昭和45年，36頁。
36) 小坂国継『西田幾多郎—その思想と現代』ミネルヴァ書房，1995年，154頁，153頁。
37) 務台理作・山崎正一編『近代社会思想史論』青木書店，1959年，350頁，366頁。
38) 現代思想研究会編『知識人の天皇観』三一書房，1995年，88頁。
39) 小牧　治『国家の近代化と哲学』御茶の水書房，1978年，333頁，332-333頁。
40) 清水幾太郎『私の社会学者たち』筑摩書房，昭和61年，290頁。

＝参考文献＝

伊東光晴・根井雅弘『シュンペーター』岩波書店，1993年。
岩波講座近代日本と植民地２『帝国統治の構造』岩波書店，1992年。
現代思想研究会編『知識人の天皇観』三一書房，1995年。
経営学史学会編『経営学の位相』文眞堂，1994年。
小坂国継『西田幾多郎―その思想と現代』ミネルヴァ書房，1995年。
小牧　治『国家の近代化と哲学』御茶の水書房，1978年。
清水幾太郎『私の社会学者たち』筑摩書房，昭和61年。
清水太郎「『歴史的形成作用の論理』の光と影」『現代思想』1993年１月。
瀬川　浩『新版経済哲学の方法序説』敬文堂，昭和45年。
中岡成文「西田哲学の知と悲しみ」『現代思想』1993年１月。
西田幾多郎全集第８巻『哲学論文集第１・第２』岩波書店，昭和40年。
藤田健治『西田幾多郎 その軌跡と系譜―哲学の文学的考察―』法政大学出版会，1993年。
裴　富吉『経営学発達史』学文社，1990年。
務台理作・山崎正一編『近代社会思想史論』青木書店，1959年。
山本安次郎『公社企業と現代経営学』建国大学研究院，昭和16〔康徳８〕年９月。
山本安次郎『経営管理論』有斐閣，昭和29年。
山本安次郎『経営学の基礎理論』ミネルヴァ書房，昭和42年。
山本安次郎『経営学研究方法論』丸善，昭和50年。
山本安次郎『日本経営学五十年―回顧と展望―』東洋経済新報社，昭和52年。
山本安次郎「経営学と哲学との関連について―裴教授の批判に答える―」，亜細亜大学『経営論集』第14巻第２号，1979年３月。
山本安次郎「組織研究の現代的課題」，組織学会『組織科学』第26巻第４号，1993年４月。

―1993．6．9―
―1995.12.25―